新刊紹介

過去約2年間に発行された書籍の中から時事的で話題性があり内容豊かなものを会員のご要望に応えながら編集委員会が選択して紹介いたします。

『内・外亡命者のあなたと私』

ツェリン・オーセル&劉燕子 著｜未來社、2025年、208pp.

本書は、文学活動における表現の自由のために国内亡命者となったチベットの詩人ツェリン・オーセル（Tsering Woeser）と、中国出身の国外亡命者として日本で暮らす詩人で翻訳家の劉燕子というふたりの女性の交流を、詩のやりとりでとらえた詩集です。詩で綴られた交換日記と言ったらわかりやすいかもしれません。

オーセルは、『殺劫――チベットの文化大革命』（2006年台湾で出版、2020年英訳出版、2025年日本語訳出版）で世界に知られるようになりましたが、中国当局に抵抗する「裏切者（ウォロバ）」との烙印をうたれ、職場を追われ、パスポートを奪われ、自宅軟禁を幾度も体験し、常に監視や尾行がおこなわれている状態で暮らしています。台湾で出版されたオーセルの著書は20冊以上になりますが、彼女の著作は中国本土の公立図書館では閲覧も貸し出しも禁じられています。自国にいながら亡命者となったオーセルはそれでも、監獄に閉じ込められ拷問を受け続けている政治犯や僧侶、ネットでの発言を理由に捕まったり、理由もわからないうちに突然逮捕されたりしている同胞のことを世界に知ってほしいと、「右手にペンを握り、左手で記憶を掴み」声を挙げ続けています（詩篇「こんな詩なんて役に立たないけれど、ロサン・ツェパクに捧げたくて……」より）。

オーセルとの20年にもわたる交流を経て、劉はオーセルの声を日本語読者に伝えようと奮闘します。そして、オーセルの詩声に呼応するように、自身も「チベット人抗議焼身が160人目となった」日に（詩篇「チベットの秘密」より）、あるいは6月4日（天安門事件の日）に、同胞の死傷者達を想い、「忘却が孵化する」瞬間をうたいあげます（「藍い雪は陽炎のように立っている」より）。

アジア太平洋戦争中のプロパガンダに多くの詩人が加担した経験から、敗戦後の日本では政治的な詩は自重される傾向が強くありましたが、昨今では傾向がかわってきました。本書をはじめ、『ミャンマー証言詩集　いくら新芽を摘んでも春は止まらない』（2024年）、『ソマイア・ラミシュ詩集　わたしの血管を貫きめぐる、地政学という狂気』（2024年）等、海外で発表された抵抗詩の翻訳が目に留まるようになりました。ニュースからだけでは知りえない彼・彼女らの心の叫びに、詩を通して耳を傾けることで、私たちが学ぶことは多いはずです。グローバル社会を生きる現代人にとって、これらの現実は対岸の火事ではないのです。

（評／滋賀大学経済学部教授／菊地利奈）